

高橋さんの思い出

山下 太郎

高橋さんのことを思い出すと、感謝の二文字しか思い浮かばない。学部時代、最初にお世話になったのは卒論のことである。当時の学生研究室で「(論文は) 進んでる？」と声をかけて下さったのが高橋さんだ。時は秋。私はルクレティウスの第三巻序歌で論文に取り組むつもりであったが——中村善也先生の授業でここを読んでいたので選んだに過ぎない——、ほとんど何も進んでいなかった。正確に言えば、論文の書き方のイロハのイも知らなかったので、何から手をつけたらよいのかわからぬままであった。

隣には(中村先生を敬慕して)同じ授業に参加されていた岩谷さんもおられた。高橋さんは岩谷さんと一言二言言葉を交わされた後、おもむろに本棚から OCT を取り出し、該当箇所を開くと眼光鋭く序歌を通読されたうえ、第三巻一行目の E は O の読みもあることを指摘された——授業のテキストでは O となっていた——。続けて、同じ行の extollere は ex-tollere と分解でき、そのこととの関係で云々云々、という話をされた。続く岩谷さんとの掛け合いの話はさらに貴重な内容だったに違いないが、初心者の中にはあまりに高尚であり、とうてい理解できるものではなかった。ただ最後に言われた言葉、「まずはテキストを精読すること、その上でコメントリーと先行研究を読めば問題点が見つかるよ」、これはその後岡先生から頂戴した助言と同じ内容であった。

その後時は流れ、私は諸先生だけでなく多くの先輩から貴重な学びを得たが、お世話になった諸先輩の中心にはいつも高橋さんがおられた。「模範は教える、命令しない」という格言どおり、もっとも大きな学びを得ることができたのは、「西洋古典論集」に掲載された高橋さんのプロペルティウスに関する論文からであった。当時の私にとって高橋さんの論文は、難解なパズルの種明かしのように思われた。むろんそんな表層的なとらえかたではいけないのであるが、ラインマーカーを引きながら、なぜ「A は B であり、したがって C は D である」と言えるのか、野球少年がスイングの連続写真を見てフォームを模倣するように、何度も原文とつきあわせながら精読したのは、懐かしい思い出。

私は高橋さんと入れ替わりに工織大学に就職したが、高橋さんが使っておられたのと同じ研究室をあてがわれ、パソコン(NEC98)もそのまま使うことが許された。引継ぎのさい、「データは置いておくね」とあっさり言われたが、これがどれだけ温情に満ちた言葉であったか、そのときは何もわからず、「どうして初期化されないのだろう」と思った。一人になってパソコンを立ち上げると、どうだろう。シラバスをはじめとするおびただしい学内業務の文書から科研費の申請書の控えのファイルに至るまで、膨大な文書

群が整然と分類され保存されていた（実物をお見せ出来ないのが残念である）。必要に迫られてファイルを開くたび、高橋さんの几帳面なお仕事ぶりに息をのみ、心の中で手を合わせた。

その後さらに時は流れ、私は父の残した仕事を継承すべく大学を辞め、新たに私塾（山の学校）を立ち上げたこともあって忙しかったが、その年（2003年）二度目の学会発表に挑戦した。最善を尽くしたものの、結果は論文不採用であった。その知らせをいち早くメールで伝えて下さったのが高橋さんで、「もっとできるはず」という趣旨の温かい励ましの言葉が添えられていた。

この言葉を機に、私は自分のできることを熟慮した結果、以後教育者として私塾における古典語教育の拡充に努めることを心に誓い、自ら東京、名古屋にも出張し「ラテン語講習会」を定期的に開いて今に至る（現在は zoom のみ）。この間高橋さんと直接お会いする機会は皆無に等しくなったが、逆に今ほど高橋さんをはじめとする西洋古典の先生方と活発に対話と議論を重ねているときはない、と思える。というのも、ラテン語の講読クラスの資料を作るさい、私は初学者の便宜を考えテキストのすべての単語に注を付けているのだが、そのさい諸先生の翻訳や研究書を参照することが日常化しているためである。

今読んでいる作品は、『アエネーイス』、『ガリア戦記』、『倫理書簡集』、『人生の短さについて』、『老年について』、『ピリッピカ』、『スキューピオーの夢』（二度目）であるが、会員（実数約四百人）の熱意に導かれるまま、読む作品の数がこれだけ増えたことはある意味喜ばしい。『アエネーイス』と『ガリア戦記』はちょうど第一巻の資料が完成したところで、読む速度は遅いが密度は濃い（それぞれの資料はワードで 350 ページと 530 ページになった）。『アエネーイス』は五年で一卷読む計算なので、全巻読み終えるにはあと半世紀必要であるが、参加者はそのことを承知のうえで第二巻以降も読み続ける気力に満ちている。私も「次の世代に役立つよう木を植える」気持ちでいっぱいである。

論文を書く研究者は、アルプスの山頂を目指す登山者のように貴重な存在である。私は我が国の文化が真の豊かさを実現するため、今後西洋古典の高みを目指すクライマーが一人でも増えることを願ってやまないが、そのためには富士山のすそ野のような、国民の西洋古典への理解と関心の広がりが必要であると思う。今の私はこのすそ野を広げる仕事に尽力していることにささやかな誇りと満足を覚えるが、その前提として、今回ふりかえてみたように、人生の節目節目で私に温情ある言葉をかけ、あるべき方向を示唆して下さい高橋さんの存在を思わずにいられない。ご退職にあたり心からの敬意と感謝をささげたい。